



# MALAWIへ行って見えてきたもの、 統計資料や統計地図から見えてくるもの

岡山県立岡山芳泉高等学校 担当教科：地理歴史・公民科 林 俊輔

◆実践教科：地理B ◆時間数：4時間 ◆対象学年：3年次生 ◆対象人数：81名

## カリキュラム

### ◆実践の目的

グローバル化する現代世界において、諸課題の捉え方やその偏差を明らかにする。

特に、今回訪問した後発開発途上国マラウイのライフライン(電化率等)の普及率、乳幼児死亡率、GNI、平均寿命、安全な水の確保等データでしか知らないことや実際に見たものを通して、マラウイだけに特化することなく、国際理解とは何か、多文化共生社会とは何か、あるべき国際支援の姿とは何か等々の一端に触れさせ、そこから本当のしあわせとは何かを考えさせたい。

そして、受験期の今は人生の一通過点であり、将来的に国際人として飛躍すべく、各人各様の国際理解・国際社会への貢献を考察するための一助とする。

### ココがすばらしい！

受験を控えた3年生に対し、社会科授業の中で生徒達に「生き方」や「幸せ」を考える授業を実践。  
統計資料の数値で国の概要を教えながら、それと同時に数値からは見えてこないものの、見落としてはいけない大切なものがあるということを生徒に伝えた。

## 授業の構成

| 時限 | テーマ・ねらい                                                  | 方法・内容                                                                                                         | 使用教材                               |
|----|----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| 前時 | <b>アンケート実施</b>                                           | マラウイ・アフリカ・JICAについて知っていることについてアンケートを実施                                                                         | ・アンケート用紙                           |
| 1  | <b>マラウイを知る</b><br>1. 空港～Lilongwe市内の光景<br>2. マラウイアン達の生活   | ・マラウイ・アフリカ・JICAについての意見の共有<br>・マラウイ資料やPP1の視聴により現実のマラウイを見る<br>・ワークシート1で授業をまとめる                                  | ・PP1<br>(空港～Lilongwe)<br>・ワークシート1  |
| 2  | <b>格差の現実</b><br>1. 情報格差<br>2. 南北格差<br>3. 南南格差<br>4. 教育格差 | ・インターネット普及率<br>・1日1\$以下の生活者の割合<br>・1人あたりのGNIと後発開発途上国<br>・就学率と年少人口、黒人人口の割合<br>・教育を受ける機会の不平等<br>・ワークシート2で授業のまとめ | ・PP2<br>(Muwatibu中等学校)<br>・ワークシート2 |
| 3  | <b>欧州による植民地支配が残したもの</b><br>1. モノカルチャー経済<br>2. アフリカの抱える課題 | ・GDPに占める農業生産の割合<br>・穀物自給率<br>・植民地分割<br>・公用語<br>・ワークシート3で授業のまとめ                                                | ・PP3<br>(小規模灌漑プロジェクト)<br>・ワークシート3  |
| 4  | <b>危険にさらされる命</b>                                         | ・乳幼児死亡率<br>・安全な水<br>・成人に占めるHIV感染者比率<br>・栄養不足                                                                  | ・PP4<br>(cassava村へ)<br>・ワークシート4    |
|    | <b>国際協力・国際理解とは</b>                                       | ・ODA(政府開発援助)の経年変化<br>・しあわせとは<br>・自分の出来る国際貢献について<br>・ワークシート4で授業のまとめ                                            |                                    |

※PP：パワーポイント

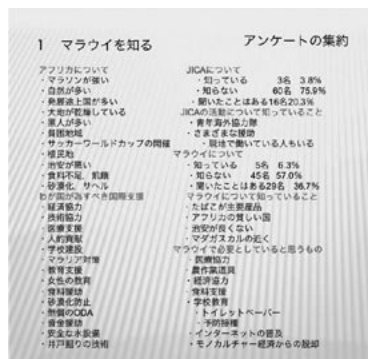
## 前 事

## マラウイ・アフリカ・JICAについてのアンケート実施

生徒にとってアフリカとは大変遠い存在であると思われる。

平素の授業で取り上げる回数も、試験での出題回数も低くなっている。

しかし、今回の研修参加や2010年に開催されるサッカーワールドカップ南アフリカ大会等を良い契機として、アフリカの抱える諸問題をより身近な存在とし、教材として取り込みたいと考えた。このことが将来的に生徒自身に、国際理解や多文化共生社会の一員としての自覚に繋がるものと考えた。また、JICAの活動については、どれほどの浸透度があるのかを客観的に調べるためにアンケートを実施した。



### 〈所感〉

生徒達のアフリカへの認知度は想定通り大変低いものであった。

ただし、この時点でアフリカを地誌としての授業を実施していなかったことも、このような結果となった要因であると考えられる。そして、あまりにもマイナス的なイメージとしてアフリカ全体を捉えすぎているのではないだろうか。このことを念頭に置きながら、授業時では、生徒の知っていること、知らないこと、誤った認識を正しながら授業実践を進めていきたいと考える。また、JICAについてはもっと、体系的な広報活動が必要ではないかと感じるものであった。

## 1 時限目

## マラウイを知る (ワークシート1)

実際のマラウイを少しでも生徒達に感じ取って欲しいので、今回撮影した実際のビデオや写真をパワーポイントで紹介した。併せて、マラウイ日本大使館やJICAマラウイ事務所訪問時に頂いたデータを配布し、基礎的な数値を提供した。ビデオは、空港到着から市内視察したもので、写真はマラウイアン達の日常生活を中心に撮影したものである。これらの中から少しでも社会的に格差の存在していることも併せて紹介した。

ワークシート1

マラウイ共和国についての基礎知識

正式名称  
マラウイ共和国 (Republic of Malawi)

一般事情

- 面積 11.8万km<sup>2</sup>(北海道と九州を合わせた面積)
- 人口 1,392万人(2007年推定)
- 首都 リロングウェ
- 民族 バンツワ系
- (主要部族はチュワ族、トンブウカ族、ンゴニ族、ヤオ族)
- 公用語 英語、チュワ語、(ともに公用語)
- 宗教 キリスト教(約75%)、イスラム教(約20%)その他伝統宗教
- 国祭日 7月6日(独立記念日)
- 略号

1891年 英保護領

1951年 ローデシア・ニヤサランド(現マラウイ)連邦

1964年 英国より独立

1968年 共和制に移行(マラウイ議会党による一党制移行)

1971年 バンダ大統領が終身大統領に就任

1993年 国民投票により一党制から複数議会制へ移行

1994年 独立後初めての大統領・国会選挙でムンシジ大統領就任

1999年 ムンシジ大統領再任

2004年 総選挙(5月)によりムタリカ大統領就任

2009年 総選挙(5月)によりムタリカ大統領再選

ワークシート1

資料1

経済事情

- 1. 主要産業 農業、工業
- 2. GNI 35億米ドル(07年、世銀)
- 3. 一人当たりGNI 250米ドル(07年、世銀)
- 4. 経済成長率 7.4% (07年、世銀)
- 5. インフレ率 7.6% (07年、世銀)
- 6. 失業率 不明
- 7. 輸出品・主要貿易品目(2006年、年次経済報告08年版)
- (1) 輸出 709百万ドル(たばこ、紅茶、衣服・繊維製品、砂糖、ナッツ)
- (2) 輸入 1,268百万ドル(石油、生産資材、消費財、消費財)
- 8. 主要貿易相手国(2006, CIA The World Factbook)
- (1) 輸出 南ア(12.4%)、独(12%)、エジプト(8.4%)、ジンバブエ(8.3%)、米国(7.5%)、ロシア(4.5%)、オランダ(4.5%)
- (2) 輸入 南ア(34.9%)、インド(8.2%)、ジンバブエ(7.8%)、タンザニア(5.98%)、米国(5.9%)、中国(4.3%)
- 9. 通貨 マラウイクワチャ(MKW)
- 10. 為替レート 1米ドル=14.0MKW(2009年6月現在)
- 11. 経済状況

伝統的な農業国であり、労働人口の85%が農業及び農業関連事業に就いているが、運送、建設、地方自治・県道等の国際市場に外資収入を左右する。たばこ、紅茶、砂糖等の農産物が全輸出の85%を占めており、これら農産物価格の国際市場に外資収入を左右する。09年より北部のカエレケレのワラン山(標高推定1,000m)で年間1,500トン規模で採掘を開始。輸出額は輸出総額の20%程度を占める。マラウイは、ユネスコの世界遺産に指定されているマラウイ湖を始めとして、比較的観光資源に恵まれているため、観光産業の発展が農業に次ぎ経済開発の鍵を握っている。

経済協力

青年海外協力隊及びシニア海外ボランティアの派遣においてマラウイは、派遣員数世界第一位の国(2008年11月までの累計は1,406人)、2008年11月現在の派遣者数は79名(内女性40名)。2008年9月にはマラウイ外務省が難民職員に対し謝罪状を授与した。(マラウイ大使館資料より引用)



↑道路端で売られる棺桶

←The Warm Heart of Africa Malawiの観光ポスターより



## 生徒の感想・意見

- ・マラウイにおいては、全国で電化率が7%、地方ではほぼ1%という。今の生活の大半が家電製品に囲まれた生活をしている私にとって、苦しいとしか言えない。しかし、本当にマラウイの人たちは電化を望んでいるのだろうか。電化率が低いことで貧しいと思っていることは、先進国に住んでいる我々のおごりと言うことは出来ないだろうか。日本だって、江戸時代は多分マラウイと同じような生活をしていただと考えられる。
- ・路上生活者や飢えに苦しむ人、裸の人、野生動物がいなかった。アフリカに対してイメージが変わったというか、自分が偏見を持って捉えていたことがある意味恥ずかしい。授業がすべて英語で行われることに驚かされた。ここにも、植民地支配の影響があるのだなあとと思った。
- ・日本には無駄な物が多い。「豊かさ」とは何か。日本がマラウイから学ぶべきことがある。
- ・日本では、基本的に公共機関やコンビニでも無料でトイレを貸してもらえるのに、市場の中に有料の水洗トイレがあるとのこと。地方の家庭のトイレにドアがついていないこともショックだった。同行の女性の方々もそこで、用を足されたということから、私も多分使うことができると思うけど…。

## 〈所感〉

視覚的資料を使用することにより、授業の目的であったマラウイ人の日常生活の一部は、少しは理解することが出来たと思われる。ただ、提供資料数が多すぎたために、各資料ごとの説明が、駆け足になってしまった。もう少し資料を厳選する必要性も感じるが、より多くの資料から生徒達にマラウイの現実を伝えたいという思いもあったので、このような形となった。現実の格差の把握という中で、生徒の感想にも見られるように、「豊かさ」を考えることへと繋がった者もあり、当初の目的も達成することは出来たといえる。

## 2 時限目 格差の現実 (ワークシート2)

前時からの継続として、生徒には格差について直視して欲しいということで、教材の中から資料として、使用できるデータを効率的に活用することを念頭に授業を構成した。これらを通じて、格差の現実を学習し、今われわれに出来ることは何かを、生徒自身に考えさせる機会となればと考えた。生徒にはさらに、われわれの周りにある情報格差や経済格差、教育格差について考えさせたい。

**2 格差の現実**

1 情報格差

- 情報ネットワークの出現
  - ・情報化社会…インターネット利用者数や普及率が急激に増加
  - ・情報技術 (IT) 革命…コンピュータの進歩・低価格化
  - 情報化社会における地域差 = Digital Divide (デジタルデバイ)
  - ・IT革命から取り残される発展途上国
  - 発展途上国でも情報化の恩恵を受ける一部の階層と受けない階層の格差拡大

2 南北問題

- 確認からわかること
  - 北…北緯30度以北にGNIが高い国が多い
  - 経済的に豊かな国 先進国
  - 経済的な格差
  - 南…北緯30度以南にGNIが低い国が多い
  - 経済的に貧しい国 発展途上国
  - 南の中で比較的GNIが高い国
  - 豊富な地下資源・工業化の進展
  - 経済的な格差
  - 南の中でGNIが極めて低い国
  - 少ない地下資源・工業化の遅れ
  - 南南問題

■地帯化によって見えるもの

南北問題 (南北格差)

先進国…経済的に豊か→インフラの整備が行きわたる  
(水道・電気・ガスなどの生活基盤)  
発展途上国…経済的に貧しい→インフラ整備遅れがち

■発展途上国での問題

数億人→多くの貧困や飢餓の必要性→薪を得るため森林伐採  
→土地の荒廃・砂漠化  
下水を未処理のまま排水→河川や地下水の汚染→伝染病発生  
→伝染も少なく、死亡のケースが多い

南北問題 (南北格差) →環境破壊や環境汚染という問題を引き起こす  
人々の生活にも影響を与えている

■問題が起る背景

- ・大都市の開発や工業化を優先→農村部でインフラ整備遅れ
- ・農村→都市への急激な人口移動→都市部でもインフラ整備遅れ
- ・農村→都市への急激な人口移動→都市部でもインフラ整備遅れ
- ・急激な工業化→インフラ整備遅れ→工業化遅れ→雇用の改善
- ・対策…先進国による援助→政府開発援助 (ODA) が好例
- ODAの問題点
- インフラ整備→都市部の開発や工業化
- 環境破壊問題の発生

**3 南南問題**

■貧困の現状

- ・発展途上国…生活水準が低い人々の割合が高い国多い
- 特にアフリカ、南アジア
- ・貧困が社会問題化し、後発発展途上国 (LLDC) もある

■アフリカでも例外あり…北部諸国、南アフリカ共和国

■アフリカの地域区分

- ・低所得者の割合が高い国と後発発展途上国が一致する傾向
- アフリカ中央部に集中
- ・貧困層が比較的少ない国…地中海沿岸諸国と南アフリカ共和国
- ・黒人人口比が高い地域
- 高い格差関係
- 低所得者の割合が高い地域
- アフリカを三つの地域に区分することが可能
- 北アフリカ 中東アフリカ 南アフリカ共和国

**4 教育問題**

■地帯化によって見えるもの

就学率…実際に教育を受けている人々/教育を受けられる人口

- ・先進国は高く、発展途上国は低い
- ・発展途上国では、教育を受けられない子どもも多い

■教育を受ける機会の不平等

- ・発展途上国では教育環境が未整備の国が多い
- 現在、世界に約10億人の非就学者
- ・ストリートチルドレンも多い
- ・初等教育は現地語でも、中・高等教育は旧宗主国の言語が多い
- 一部の富裕層に限られ、貧困層はますます貧しくなる
- 南北問題解決の妨げにも

■貧困の改善と教育の必要性

- ・教育環境は改善傾向…知識・技術の習得、貧困の改善に不可欠
- ・都市部の学校、高等教育が優先で、貧困層の教育改善進まず
- ・女性に教育は必要という考え方が根強い

↓

女性の識字率・就学率は男性より低い

↓

女性の就業機会を減らす

↓

出生率の低下を妨げる

PP2を発展途上の格差の整理

## 生徒の感想・意見

・机がないまま椅子に座って授業を受けていた。教科書やノートや辞書が当たり前のように無い。ものに恵まれすぎている我々の生活を再考させられた。

・先進国と発展途上国の地域間で情報化をめぐる格差(デジタルデバイド)が存在している。そして、情報化が南北間の地域格差を拡大する要因にもなっていることに驚いた。

・ストリートチルドレンも多く、初等教育は現地語でも、中・高等教育は旧宗主国の言語が多いことがわかったが、このことはアフリカにおける植民地支配の歴史の中で、数少ないプラスの作用(公用語として旧宗主国の言葉が使用されている)として、各部族間の意思の疎通ができるという皮肉な結果をもたらした事実には複雑な思いがした。これから進学後言語学を学ぼうとする時に、これらのことを念頭に置きながら、国際理解の一端を担うことができると考える。

・貧困が貧困を呼び、より一層格差が広がって南北問題解決の妨げになっている。このことは我が国でも同じといえないだろうか。先生の話の中からは、特にマラウイの人たちは、競争しながら、他との比較の中で幸せを求めようとはしていないと聞いた時に、何故かどきとした。その理由はよくわからないが、今受験期を過ごしている自分は、あまりにも、周りが見えていなかった気がしてならない。

・女性に教育は不必要という考え方が根深いことから、女性の識字率・就学率は男性より低く、女性の就業機会を減らしているという。同じ女性として許せないが、日本にはこのようなことが本当にないと言い切ることができるのだろうか。



ムワティプ中学校授業風景



ムワティプ中学校授業風景のビデオ



カスング教員養成校の体育実技の授業(ゴールポストにはネットが無い)

## 〈所感〉

授業風景など生徒に共通した資料を提供したことなどで、生徒達にとってより身近なものとなったようである。

格差の解消に向けた、現実的な実践は教科書などで教えられるものではない。このことについて、生徒達の真剣に正面から取り組もうとする姿勢に、これからの日本の未来もそんなに見捨てたものでないと感じられた。生徒達の授業後の感想に見られるように、国際理解教育推進においては、もっともっと早い時期に体系的に・先見性を持ち合わせながら、教育現場で実践することの必要性を痛感した。

# 3時限目 欧州の植民地支配が残したもの (ワークシート3)

欧州列強による、植民地支配は現在のアフリカ諸国に何を残しているのかを捉えさせていきたい。植民地支配による負の遺産のみが大きく取り沙汰されている。実際にこのことから、内戦や民族紛争となり人が人の命を奪い合っているという現実是否定できない。ただ、マウイは大きな内戦や紛争を経験することなく、今日を迎えている。植民地支配が残した正の遺産と考えられるものが存在するのか否かについて考えさせたい。

ワークシート3

### 3 欧州による植民地支配が残したもの

#### 1. モノカルチャー経済

##### ■地域による産業の違い

- ・北アフリカ、南アフリカ共和国
  - 地下資源豊富、工業発達
- ・中東アフリカ
  - エネルギー、鉱産資源、工業製品の輸出割合高い
- 農業の割合高く、一次産品（付加価値低い）の輸出割合高い
- モノカルチャー経済の国が多い
- 価格変動が激しく、収入は不安定、自給作物が少ない
- 経済発展の遅れ、多数の貧困層発生

##### ■食料供給の地域的なたより

#### (1) 食料自給率が低い国（多くの発展途上国）

- ・食料増産<人口増加 →食料不足、飢饉の発生
- ・災害・戦乱、輸出用作物の優先

#### (2) 食料自給率が高い国（アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアなど）

- ・農業・化学肥料・機械化→大規模な企業農業
- ・農産物を大量に輸出（世界の食料倉庫）

日本：食糧自給率は低い→経済力で食料輸入が可能

ワークシート3

### ■発展途上国の人口増加と食料不足

#### (1) 人口爆発・食料不足の原因

- ・高い出生率...子どもは労働力、高い乳幼児死亡率
- ・低下する死亡率...衛生状態の改善、医療の普及など
- ・感染症による死者・病人の増加→食料生産に支障

#### (2) 家族計画

- ・中国...「一人っ子政策」→出生率の大幅な低下
- ・伝統や宗教上の理由→家族計画の普及が困難な国もある

### ■植民地支配の影響

- ・ヨーロッパの植民地支配→アフリカ社会の貧困の一因
- ・16C~約300年間の奴隷貿易
- ・中南アフリカの黒人人口激減、固有の文化と社会の崩壊
- ・1922年までの（東西南北）の独立国
  - 東...エチオピア（不明） 西...リベリア（1867年）
  - 南...南アフリカ（1910年） 北...エジプト（1922年）
- 熱帯特有の食品、工業原料の供給地として収奪される
- プランテーション、モノカルチャー経済が残る
- ・独立後も文化・社会・経済面でヨーロッパの影響が残る



### 2 アフリカの抱える課題

#### ■アフリカの抱える課題

- ・アフリカ諸国の国境線...直線が多い(数理的国境)
- ・民族分布と無関係にヨーロッパ諸国が分割
- 同一民族が分断、対立民族が同一国家内に →内戦、政情不安定
- 貧富の格差の発生、経済発展に妨げ
- ・対策...国民教育の充実による人材育成、工業化
- 先進国の効果的援助

PP3を視聴後の感想の整理



簡易灌漑施設



## 生徒の感想・意見

- ・日本は食料自給率は低い、お金にものを言わせて食料輸入が可能になっている。私たちも生まれるところが違っていれば、今日の食事さえ困っていたかもしれない。もっともっと私たちは関心を持たないといけないと思う。
- ・私たちは、今地球を借りて日常生活を送らせてもらっているのだから、ちゃんと次世代に引き渡す義務がある。そのことを地球人として自覚しなくてはならない。
- ・地球全体として食料は足りているのに、分配がおかしいため先進国の飽食と発展途上国の飢餓という問題が生じている。日本は毎年3000万t近くも穀物を輸入している現実を考えれば、世界の飢餓を助長しているといえないだろうか。

## 〈所感〉

正の遺産として、民族理解のための旧宗主国の言語だけでは寂しすぎる。さまざまな形で、欧州文化等を浸透させたが、その恩恵に預かっているのはほんの一部に過ぎない。このことも現地における格差の拡大再生産につながったと思われる。化石燃料は再生不可能な資源である。今世界は、再生可能な燃料の生産を模索している。それがトウモロコシや大豆等である。これらからバイオエタノールの生産を目指しているが、このことが世界における穀物や食料の需給バランスに破綻をきたす恐れが指摘されている。つまり、より付加価値の高いエタノール生産の方が、生産国にとっての利益率が大きいこととなるからである。このことによって、穀物価格は必然的に上昇することが安易に予想される。そして、植民地支配がなされた時と同様に発展途上国は先進国の政策に翻弄されるということを伝えた。

## 4時限目

### 危険にさらされる命、国際協力・国際理解とは（ワークシート4）

私たちは水のない生活を考えることは出来ない。わが国において、水と安全はただで手に入れることが出来るものと多くの国民が考えているが、現実には、ただであるはずの水が手に入らずに命を落としている人々がいることを忘れてはならない。このような世界で私たちは国際社会についてどのように理解していけばいいのか、実際に何が出来るのか、また、何にどのようにアクション出来るかを考えさせたい。

#### 4 危険にさらされる命

##### ■世界の乳児死亡率

乳児死亡率は、近代的な医療が導入されたり、衛生状況が改善されたりすると低下する。先進国の乳児死亡率は1000人に対して10人未満であるが、サハラ以南のアフリカでは乳児死亡率が100人を超える国が多い。乳児死亡率が最大のシエラレオネ（166人）は、最少のデンマーク（3人）の55倍に及ぶ。乳児死亡率が高いと、たくさんの子供を生んで人口数を維持しようとするため、出生率がなかなか低下しない。

##### ■安全な水と水不足

21世紀は水の世紀ともいわれ、水の確保が人類にとって重要な課題になると考えられている。水がなければ、人間は生存することができない。「利用可能な水」の量は一定であるが、世界の総人口は増加し続けており、水をめぐる争いが深刻化することが予想される。食料問題と同様に、私たちはもっと水の問題に関心をもつ必要がある。

「利用可能な水」とは、降水量から蒸発量を差し引いた量である。すなわち、利用可能な水の量は気候条件を反映しており、降水量が多いほど、また蒸発量が少ないほど、利用可能な水の量は多い。

利用可能な水は、河川・湖・地下の帯水層に貯留され、その一部を人間が利用する。人口が多い地域では、生活用水の需要が多いため取水量が大きい。灌漑農業が盛んな地域では多量の農業用水が必要であり、集約的な畜産業も水消費型の産業である。また、工業地域では工業用水の消費量が多い。

利用可能な水に対して、取水量が40%を超えると、深刻な水不足が起こる可能性がある。

利用可能な水に対する取水量の割合が40%以上の地域は、中国中北部・中央アジア・西アジア・アフリカ北部・アフリカ南部・アメリカ合衆国西部・メキシコ北部・南アメリカ西部・オーストラリア南東部などでみられる。

世界の気候区分の図と見比べると、これらの地域の多くは砂漠気候やステップ気候の地域である。また、人口分布図と見比べると、中国やインドのように、人口密度の高い地域でも取水量の割合が多いことがわかる。

北アフリカや中央・西アジアなどの乾燥地域と、インドや中国など人口の多い地域で、取水量の割合が多い。

##### ■「利用可能な水の量と水資源利用率」

1人が利用可能な水の量には著しい地域差があることがわかる。水資源利用率を見ると、サウジアラビアやエジプト、ウズベキスタンでは100%を超えているが、このような国は中東の産油国がほとんどである。オイルマネーによる豊かな経済力を背景に、海水淡水化や下水処理水の再利用のための施設が整備されているため、このような値となるのである。

##### ■日本は水資源にめぐまれた国

日本には「湯水のように使う」という表現があるように、水はどこにでもたくさんあるものとして使われてきた。ただし、水を有効に利用するために、ダムや灌漑水路を建設したり、水を分配するためのしくみがつくられてきた。

##### ■中央や原料を生産する過程でも、多量の水が消費される

家畜は大量の飲料水を消費するばかりでなく、糞尿を処理するためにも多量の水が使われる。また、家畜飼育には、とうもろこしなどの飼料が大量に必要であり、飼料作物の栽培には水が必要であるため、飼料を消費することによって多量の水を消費していることになる。

#### ■新たな人口問題

##### （1）感染症の拡大

- ・HIV感染者の増加→平均寿命にも影響
- ・マラリア・結核
- ・食料・安全な水が供給されず→健康状態の悪化

##### （2）感染症による生産年齢人口の減少

- ・農村の社会。経済が崩壊する恐れ、孤児の増加

#### ■感染症

感染症には、インフルエンザ、マラリア、エイズ、狂犬病、腸チフス、コレラ、エボラ出血熱、ラッサ熱、結核、腸管出血性大腸菌感染症（O-157）など、さまざまな病気が含まれる。人々のものがグローバルに移動する今日、病気がグローバルに伝染する。医療の限定的な進歩にも関わらず、感染症対策は21世紀の人類にとって重要な課題である。

#### 5 国際協力・国際理解とは

##### ■しあわせとは？

##### ■自分にできる国際貢献とは

PP4を視聴後の感想の整理

## 生徒の感想・意見

- ・わが国はたくさんの牛肉や豚肉等を輸入している。家畜の飼育には大量の飼料や飲料水を消費している。また、糞尿を処理するためにも多量の水が使われている現実がある。将来、酪農家を目指しているが、これらのことも念頭に置きながら大学で頑張っていきたい。
- ・人間同士何故仲良くなれないのだろうか。民族が違おうが、宗教が違おうが、人間同士理解し合えないことはないと思う。
- ・金銭的に裕福であることよりも、精神的に裕福でありたいと思う。
- ・将来的に海外で人的貢献できる人間でありたい。
- ・教育(机や電気など教育環境の整備と就学率向上)・保健医療(啓蒙活動)に重点を置いて、もっと人を派遣すべきだ。
- ・産業を興すためにも社会資本(発電所、灌漑施設)の整備への協力が必要だ。
- ・「しあわせ」は何かと真剣に考えさせられました。そして、今私は「しあわせ」と言い切ることができるのでしょうか。きっと「しあわせ」は人との比較の中では存在しないのではないかと思う。今を生きていること、それ自体が「しあわせ」と信じて一生懸命に生きていきたいと思う。



カスング教員養成校のポスター



どこまでも続く道を歩き続けるマラウイアン

## 〈所感〉

本来救われるはずの命が助からない、生まれなくてはならない命が誕生しない現実。HIVへの感染率の高さについては、現地の人々の責任のみではないことはいうまでもない。このことを念頭に置きながら、私たちの目指すべき国際支援はただ単なる箱物支援ではなく、実効性のある支援が必要と考えられる。ODAの額や他国比較の順位のみに振り回されることなく、その内容そのものが重要となる。人的・技術的な支援、そして継続的な国際支援を国の対外外交政策にとらわれることなく、国民目線での支援を実践していくことが必要である。しかし、先進国と言われているわが国においても、さまざまな格差が解消されていない現実も、目を背けるわけにはいかないということを考えさせた。

## 成果と課題

マラウイ現地研修において多くの青年海外協力隊員と出会った。国際協力において青年海外協力隊員達が「協力」という名の下に、現地との軋轢に苦しみながらの任務の遂行・終了にならなければよいと考えた。赴任地に行かなければ見えない物、感じ取ることが出来ない物、実際のアフリカの匂い等、実際に現地を訪問することの大切さを実感することの出来た研修であった

JICAの活動について、生徒達はあまりに知らなさすぎる。これは、JICA自体の広報活動と、教育現場の我々教師自身にもそれ相応の責任があると思われる。その意味で、今回のこのプログラムへの参加は、私自身にとっても、生徒にとっても、JICAの活動を少しでも知ることの出来た良い機会となったと考える。

授業実践するうえで、現実問題としてマラウイだけを特化しての実践は出来ない。本校の目指す方向性が、進学重視型単位制高等学校と言うこともあり、十二分な時間配当が出来なかったことは残念であったが、違った形ではあったがPhoto languageを実施出来た。それが、生徒達の授業後の感想となっている。

ODAについての具体的なデータを例示することで、生徒はODAの現実、わが国の貢献度、実際の使途について考える良い契機にもなったと考えられる。しかし、このような統計データや資料・地図は現地を訪問しなくても机上で学習することは可能である。やはり現地で、現地の食事や空気、そして現地の人たちとの触れ合いを通してしか知りうることの出来ないこと、実際目で見て初めてわかることがたくさんある。このことを、授業を通じて伝えなかったし、少しではあったろうが生徒達に伝わったと確信している。

もし生徒から国際理解のためにマラウイをはじめLLDC(後発開発途上国)へ行ってみた方が良いかと尋ねられたら、私は即答するだろう。「そこへ行きなさい。行かなければ見えないものが、そこには必ずあるから。そして、君のなすべき道も見えてくるから」と。

## 〈今後の課題、展望について〉

生徒達に触れさせることの出来たマラウイをはじめアフリカの現実により、彼らにとっては、この学習以前よりはマラウイやアフリカをより身近な存在として捉えることが出来たと思われる。しかし、まだまだ格差は厳然として残存しており、私たちの国際理解も温度差があると言わざるを得ない。国際理解に対して、私たちは、決して上から目線の支援では何ら国際理解に繋がっていないということを念頭に置いて、身近な日常なことからの、個々人からの国際理解、国際貢献の実践を草の根的に広めていきたい。これが教育現場にいる私たち教師の使命の一つと言えよう。

生徒の感想から、まだまだ日本は見捨てたものではないと実感することの出来た授業となった。

## 参考資料

### 【書籍】

- ・矢野恒太記念会編(2009)「世界国勢図会(2009/10年版)」国勢社
- ・犬養道子(2006)「こころの座標軸」主婦之友社
- ・帝国書院編集部編(2003)「新詳地理B初訂版」帝国書院

### 【インターネット】

- ・「DAC諸国のODA額の推移」  
<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/0800.html>
- ・「JICAマラウイ地方電化推進プロジェクト」  
<http://www.jica.go.jp/project/malawi/5245038E0/message/index.html>

### 【写真】

- ・H21教師海外研修参加者 “Team malawi 2009” 撮影による